



酒  
山  
花  
酒

上

利  
2093  
1-3





門利 13  
彌 2093  
卷 1-3

尚出  
齋  
所

西山物部

西山物部

藤原康氏遺愛之記

後太理付之

西山物部

明治二十一年四月廿四日  
藤原 漸氏寄贈

ヤマノチ  
山坊のふて訓れこたけり松の尾といふ事。右山林  
七音といふ所のぬちらか<sup>一母同産</sup>紀<sup>日本</sup>こころをすて候り。  
いしもの名をか<sup>たしな</sup>ひ。その次なるハ熱次といふ  
いしも<sup>いし</sup>原。妻ハ<sup>あ</sup>く<sup>く</sup>な<sup>く</sup>う<sup>う</sup>て。老<sup>い</sup>家<sup>い</sup>母<sup>い</sup>信  
お<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>は<sup>い</sup>と。家<sup>い</sup>を<sup>い</sup>買<sup>い</sup>け<sup>い</sup>し<sup>い</sup>で。み<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>れ<sup>い</sup>子<sup>い</sup>し<sup>い</sup>て  
こ<sup>い</sup>も<sup>い</sup>か<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>な<sup>い</sup>も<sup>い</sup>の<sup>い</sup>ば<sup>い</sup>な<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>い<sup>い</sup>せ<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>れ<sup>い</sup>も<sup>い</sup>の  
た<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>し<sup>い</sup>事<sup>い</sup>。お<sup>い</sup>な<sup>い</sup>じ<sup>い</sup>氏<sup>い</sup>乃<sup>い</sup>家<sup>い</sup>よ<sup>い</sup>そ<sup>い</sup>八<sup>い</sup>郎<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>い<sup>い</sup>の

西山物部







と我いひはるまき家。昔のねども楠乃ぬ一信  
 しそ早強一なきはまきむ。是よりはきてそ  
 種々祝詞くられ日本紀事どもれはり一こ一試。  
 昔にたりいはれける。ははご。七代むろえれ  
 てふなりしはぬの。此る刀とさ家山寺にさあ  
 まうらき家より。されけち古語けちの及さごめくゆえ  
 げ家ととみさうえて。ある大宅乃いなる長臣のこ  
 とねうてと此ぬおもき家よりなる。昔のゆよ  
 今たからほろば。家も身まが一くあぬるる。

けりハ。け七郎ぞとのぬろみらとていがきて  
 今の母屋まよとて日本紀古事記と。ひらもた補古事記ら  
 ぶ。男まそむろわれむ。はらうおろるわの  
 家乃たからしむ家ハ。昔々の太刀一うらぶ家。  
 されとせり一く原氏物語かたぬく。さばうるる  
 におそきつる。山寺よとさえつるこそら梯一  
 まれ。原氏物語梯た梯たきたと。家をを真一た家も。  
 まる。福はが日本紀古事記。このゆいゆ家もがてぬ  
 こまかひむ。伊せぬ波何と云其太刀とらうらとてハ



なるを此たうらも七葉秋よおつくはよきなり  
由  
 と。目はおのれとらう五百枚が。こうのいぢ日本  
 そりたて。彼七代たよされ親とよめおさ  
 ける由きたまうて。おのれと我大森を  
 うりよまてさ母ら。今こごのつほいらさ  
 み寺へ沖よめなむ。さて我奉まはらあはし  
 ちかを。秋よぬ一何と我願福さける。  
 院乃何うぞ。さハ能ことお我いぞもつねと。  
 一海よおわいども。さ我き一院もせて。こぞ

一カ葉  
 うへ芝まをこひぬ。そのそけなまうれば。はるたハ心成  
 ぬ。れとよ給ふ家太カなり。ひひぞ。何めが下  
 成さる。ふみとは。中なりびや。さ人ねを  
 一す。一海おられた。さなりた。の海吉事紀以御刀之前刺  
之太カ。是者草  
割而見者左都牟刈  
那藝之太カ也云  
 こごのハ又なりぞや。さす。こふじよもせよ。淵何  
 よ。なげらち。於よと。秋は。けハ。説置給。り。  
 さ。海まが穢へ。何お。さ。りて。よ。て。ち。つ。ね。や  
 乃。沖。よ。め。置。の。こ。の。も。ら。何。れ。よ。天。う。下。れ。交







そこそとらちのりつは。うらねくえんえら  
 さ海流に流さう。古部つとたちて。彼をカと  
 こめねたふたさー金戸五葉鏡ふらぬう。体中な  
 がらひき出さく。毎さよう是ハ物たさるさ  
 了。今こそおえふなれそと。速河とさ出さ  
お夜うげ出さぬよ。何さどらねがほよそ。ハね不  
 ぬま入の那。竹取の太めき人ひとや何さ流。能ぬま入  
 まつそつるぞ。いっね遊ひそ。さうしてまじら  
 うたむ古事記用持捕ほまけれ。中めなりと。た  
搦手之字

みなをこそとらちすのりつ。何さあさあむじれ  
 たりきねとそ。























家八かやちなるの中よも。松と梅のこゝろのうら  
 よきても。其色ハうらむききとてうらむけ。  
 秋あきせこ古事記日本紀夫とよ乃おき那。ゆ身れうまれ如た  
 ちの何。唐の婦もあはさゆもこ我かきま  
 くれげむまめがまハ松とやゆじ。か柏とやゆ  
 ひと。みばうに回れぬゆらな。げたあれ  
 おりらう松ハよとせとらと。まら何とに  
 まけく。おれれたあれな海ゆんとい度てうら  
 も見ま。うとらあ本ハ。あまおゆらうとよみ

たるもともゆらうゆと。雪と初もかきけ葉で  
 いしうたふゆとありと。け子ととてうらむ  
 音ねもさしやせと。ゆらもいさりのま  
 ひもそねたてぬむもあもまうれば。おは  
 されいさをもねゆと。おれも。花もみぢら  
 乃色うねめでたも。花と今とああまが  
 い人一隊と。まらあもかくと。あてあて我真  
 ま葉ひの万ころなれまうおほすれよと何れが  
 かりたていすもたてと。あまむい何らと。







みそ子て所許をけりていふ家や一は。  
 こたびのりの家のほまれとハレど。おろど  
 かしなをとりておねどらうとを何とぞま  
 たくまきりあはるあはれも。其ららあいせ地  
 いをまじ。たきりた時をけりて何とぞ  
 是らあはれそたのみゆめまのせし記こ  
 何らそこの所をけりて万葉とてわらわとて  
 まきりたまきりて。神をけりていふとて  
 とは時を神もがらとていふとていふとて

海をけりていふ。まきりて秋はけりておろど  
 のもを海りたまきりて。海りていふとていふとて  
 浦を海りていふとて。海りていふとていふとて  
 とていふとて。人々を海りていふとていふとて  
 ひらあまよとていふとていふとて。うれい  
 ま五とていふとていふとていふとて。今より  
 のれい降とていふとていふとていふとて。今より  
 古語古語とていふとていふとていふとて。今より  
 日本紀日本紀とていふとていふとていふとて。今より  
 古事記古事記とていふとていふとていふとて。今より



へやうはごもえせめめつ。はくしの  
 ねいろし原女御何えさへい。うねびゆ  
 高ゆる標の葉あふた賜へ催馬もしゆあ  
 子。たゆらうねりこころいよしうそ  
 へいさう。そこのまよもらうをいつえ  
 はまのく。たふねえまたのあまはれ  
 ば。なむまのたかあせつるもハ利。  
 ぞりまげらうのさくら梅祝のあま  
 もいさひあはれ。さうめい如。  
詰

ともう母のいられとみうて。こらうま  
 らうま。ほもたま。物もゆま  
 てるぐれを。な詰らま。はま。  
 時きるぬらそのたごまはらま。  
 ハあしうら。種あまはあしま。  
新たふたは母あらもらう。そこのあひ  
 あらう。たぐみ新たま。  
 くもくねらま。はま。  
 ても。種懇ら懇。  
葉よゆま。いま。



















